

協同学習とは

安永 悟

(久留米大学文学部)

スライド 1



本稿は、2017年8月18日に札幌コンベンションセンターにおいて開催された第49回日本医学教育学会大会のシンポジウム「ALの実践例の紹介」でおこなったコメントに基づいています。以下、本稿に掲載するスライドは、タイトル（スライド1）を除き、当時使用したものをそのまま載せました。スライドに対する解説は、当時のコメントを思い出しながら書きました。当然ながら現時点の考えに影響されている部分もあり、そこに若干のズレが生じていることは、お含みおきください。

また、シンポジウムでは5件の報告に対するコメンテーターとして登壇しました。その際のテーマは「アクティブラーニングの核としての協同学習」でした。したがって本稿のテーマとして頂いた「協同学習とは」ともズレが生じています。この点もご理解ください。

なお、本企画「アクティブ・ラーニングで学ぼう!」と同様に、スライドにコメントを付ける形式で協同学習を解説した書籍の出版を、この9月に予定しています。本稿における「協同学習の定義」や「協同学習のイメージ」「協同の精神」「LTD基盤型授業モデル」などの解説も含まれています。関心のある方はご覧ください。

安永悟（印刷中）「授業を活性化するLTD：協同を理解し実践する紙上研修会」 医学書院.

スライド 2

コメントの視点と構成

- 視点
 - 協同学習による活動性の高い授業づくり
- 構成
 - 協同学習の基本的な考え方
 - 発表に対する総評
 - LTD基盤型授業モデルの提案

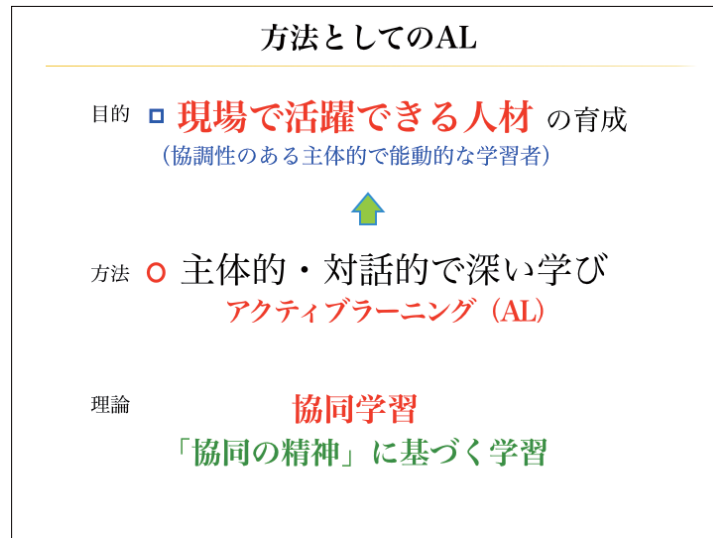
アクティブラーニング（以後、ALと略す）に関する5件の実践に対して、協同学習の立場から意見・感想を述べます。その際の視点が「協同学習による活動性の高い授業づくり」です。

「協同学習による活動性の高い授業」とは、自他の変化成長を願って、自他の学習過程に深く関与しながら、学生一人ひとりが真剣に学び合う授業です。まさに「主体的・対話的で深い学び」が実現している授業、つまりアクティブラーニングが実現できている授業です。この活動性の高い授業を企画・実践する際、私は協同学習の理論と技法に依拠しています。

「協同」の漢字表記にご注意ください。「共同」でも「協働」でもありません。「協同」です。

本コメントの構成は、まず「協同学習の基本的な考え方」をALとの関係に着目して述べます。そこでは協同学習の定義とイメージ、「協同の精神」について述べます。そのうえで報告全体に対する簡単な総評を述べ、そのなかでLTD基盤型授業モデル（以後、LTD授業モデルと略す）を紹介します。

スライド 3



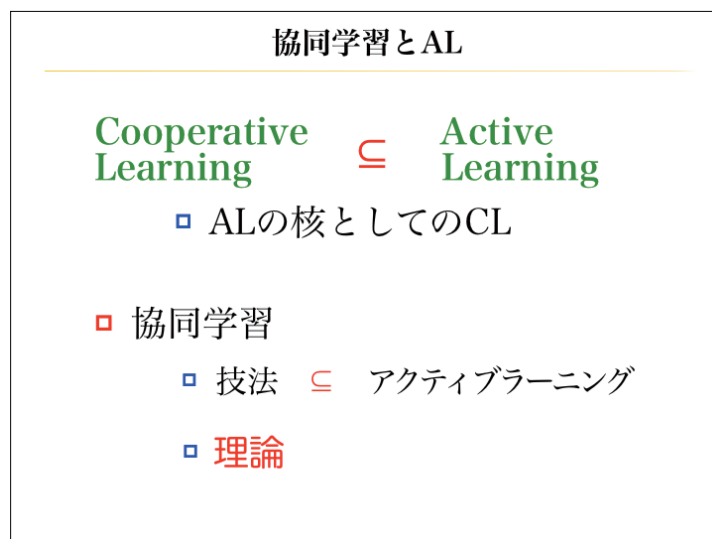
現在、日本の教育界は小学校から大学まで「主体的・対話的で深い学び」すなわちALによる授業づくりが求められています。このような大きな流れの中にあって、教育の現場を担っている多くの教師がALを中心とした授業づくりに取り組まれています。

日本におけるALはグループ学習の技法として一般的に理解されています。ALを技法と捉えるのであれば、ALを導入する目的を明確に意識する必要があります。しかしながら、教育目的とALとの関係を明確に意識している教師は必ずしも多くないと思われれます。ALが推奨されているので、数あるALの技法のなかで使えるような技法を授業に導入している、と思いたくなるような実践が少なからず見受けられます。つまり、ALを授業に導入すること自体が目的化している実践です。

私の教育目的を一言で表せば「現場で活躍できる人材の育成」となります。この目的の達成に有効な方法としてALを捉えています。教師中心で一方向的な従来の授業では、不可能ではないにしても、相当な困難が予想されます。そこで学生中心の双方向で対話的な授業を実現するためにALに対して大きな期待をもっています。

「協調性のある主体的で能動的な学習者」でもある「現場で活躍できる人材」の育成を目指したALを考える際、私が依拠している理論が「協同学習」です。「協同の精神」に基づく学習と表現することも可能です。

スライド 4



協同学習とALの関係をもう少し検討したいと思います。

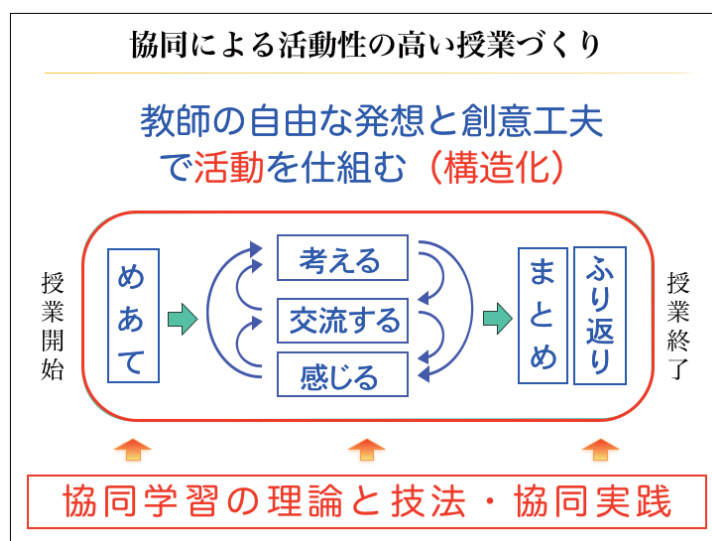
協同学習の英語表記は Cooperative Learning です。またALは Active Learning です。両者の関係は議論のあるところですが、Cooperative Learning = Active Learning とみなす立場もあります。私は、両者は包含関係にあり、Cooperative Learning を Active Learning の核とみなしています。

ここで注目して欲しいのは、Cooperative Learning は有効な技法の集大成であると同時に、それらの技法を根底で支える理論でもあるという捉え方です。

ところが、日本では協同学習を技法として捉える傾向が強く、理論として捉えることはなかなか浸透していません。例えば、日本でのアクティブラーニングに関する各種の調査項目をみると、協同学習は一つの技法として取り扱われています。

協同学習はアクティブラーニングの核となり得る実証的な教育理論でもある、という点を是非ともご理解ください。

スライド 5



この協同学習の理論と技法に基づき、教師の自由な発想と創意工夫で、授業内の活動を仕組む、つまり構造化することが「協同による活動性の高い授業づくり」の基本です。

授業は「めあて・展開・まとめ」の段階で構成されるのが一般的です。協同学習を技法として捉えている教師は、授業の展開部分にグループ活動を取り入れることで事足りると考えているようです。しかしながら、協同学習の基本的な考え方（理論）を十分に理解せずに授業にグループ活動を取り入れても、活動性の高い授業になることは期待できません。教育についての基本的な考え方を変えずに、協同学習の技法を導入するといった木に竹を接ぐような授業では学生が混乱するばかりです。

授業の開始から終了まで、どの段階も協同学習の考え方と技法に基づいて計画・実践する必要があります。授業の「展開」におけるグループ活動のみならず、「めあて」の意味や働きを協同学習の観点から捉え、「めあて」の提示方法を創意工夫する必要があります。「まとめ」や「ふり返り」も同じです。授業が始まってから終わるまで、全ての段階で協同学習の理論と技法に依拠した授業づくりが求められます。

スライド 6

定義： 協同学習（協同教育）とは

- 協同して学び合うことで、**学ぶ内容の理解・習得**を目指すとともに、**協同の意義に気づき、協同の技能を磨き、協同の価値を学ぶ**（内化する）ことが意図される教育活動である。

（関田・安永, 2005）

さて、協同学習の定義です。いろいろな研究者が定義を述べていますが、ここでは関田・安永（2005）の定義をあげておきます。

協同学習とは「協同して学び合うことで、学ぶ内容の理解・習得を目指すとともに、協同の意義に気づき、協同の技能を磨き、協同の価値を学ぶ（内化する）ことが意図される教育活動」です。

定義の最後に「教育活動」と書かれています。つまり「協同学習は教育活動である」と読めます。この言葉から、協同学習はグループ学習といった狭い世界に留まることなく、広く教育活動全般を対象とした考え方（理論）であると理解できます。この点にも注目してください。

蛇足ですが、日本では協同学習を中核に据えた教育活動や授業実践の普及を目指して、2004年に日本協同教育学会が設立されています。

スライド 7

定義： 協同学習（協同教育）とは

- 認知と態度の同時学習
- 認知： **学ぶ内容の理解と習得**
- 態度： **協同の意義に気づき
技能を磨き
価値を学ぶ**

話しを戻しましょう。

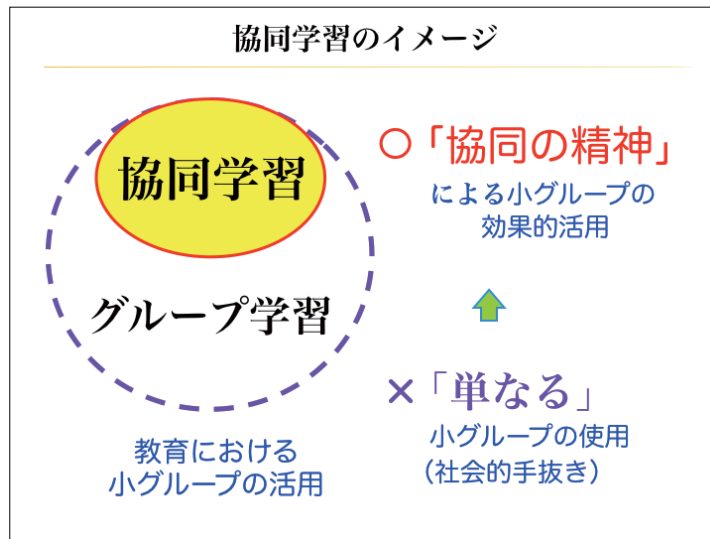
この協同学習の定義は、協同で学び合うことで二つの点が獲得できると述べています。一つが「学ぶ内容」です。もう一つが「協同」についてです。

このスライドでは「学ぶ内容」を認知に、「協同」を態度に分類しています。認知は、学習内容の理解と習得、一般的な「成績」に対応します。協同学習は学生一人ひとりの成績を高めることを第一の目的としています。この点は大切です。決して仲良く学び合えば、それでいいというものではありません。

一方、態度は特定の授業に関わらず、人間生活全般に通じる身構えと言えます。ここでは協同についてその意義に気づき、協同の技能を磨き、実践することで、協同の価値を深く学ぶことができるといっています。

つまり、協同学習の理論と技法に基づいて授業を企画・実践すると、その授業のなかで認知と態度の両面が同時に学習できるというメリットが期待できます。これを協同学習では「認知と態度の同時学習」と呼んでいます。

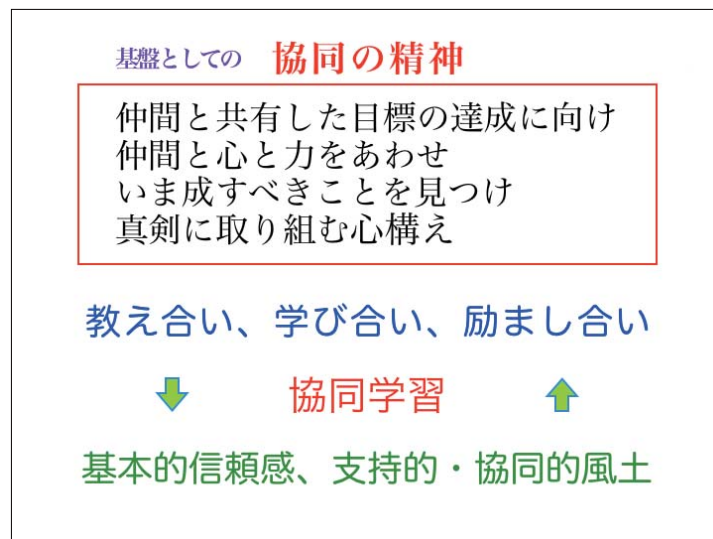
スライド 8



協同学習を「教育における小グループの活用」と捉えることは間違いではありません。しかし「学生をグループに分けて活動させれば期待する効果が得られる」というものではありません。残念ながら、このような甘い考え方に沿ったグループ学習が、教育現場には少なからず見受けられます。単なる小グループの使用では、期待された効果は得られません。逆に「手抜き（社会的な手抜き）」が横行し、学生の不平不満の温床となります。

単なるグループ学習と協同学習を明確に分けるものが「協同の精神」です。授業を計画し実施する教師の側にも、その授業に参加し活動する学生の側にも「協同の精神」を認める志向性を前提としているのが協同学習です。ここで「志向性」を強調したのは、最初から「協同の精神」があればそれに越したことはありません。しかし、一般的には最初からあるものではありません。「協同の精神」の善さを直感的に理解し、少しでも近づきたいという思いを大切にしたいと思います。この志向性があれば、早晩、「協同の精神」は獲得され、協同学習が成立すると考えています。

スライド 9



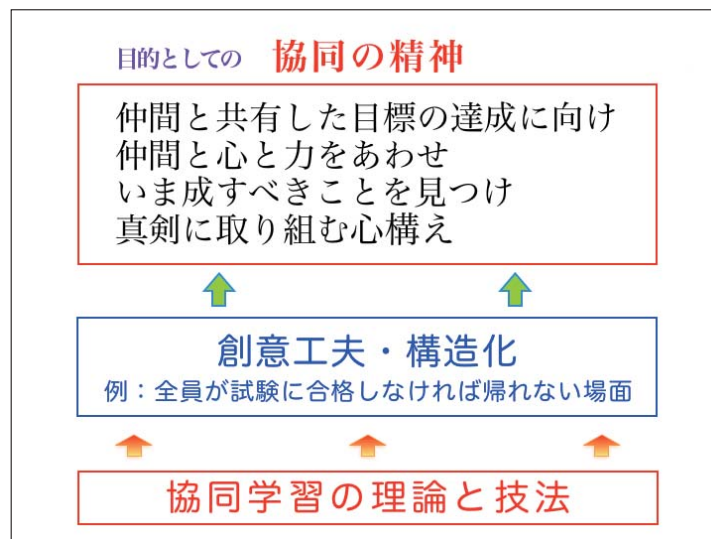
「協同の精神」とは「仲間と共有した目標の達成に向け、仲間と心と力をあわせ、いま為すべきことを見つけ、真剣に取り組む心構え」です。

まず大切なのが、仲間と目標を共有することが協同の前提となる点です。仲間と目標を共有していなければ協同しようにも、協同できません。そのうえで、共有した目標を達成するために仲間と心と力を合わせ、いまの自分にできることを自分から探し出して真剣に取り組むことが求められます。

ここで大切なのが「真剣に」ということです。往々にして「協同」は「和」と混同され「仲良くみんなと一緒に」と捉えられがちです。むしろ、「協同」の前提として「和」は大切です。しかし、そこに留まってははいけません。「協同の精神」にはもっと厳しい世界が求められています。

この「協同の精神」を基盤として、教え合い、学び合い、励まし合うことにより、協同という同一尺度に基づく基本的信頼感が生み出され、支持的風土が培われます。支持的風土とは「なにを言っても許される」「素顔の自分をだしても受け入れられる」といった雰囲気が備わった学びの場をさします。「協同の精神」を基盤として学び合うことにより、真剣な学びの場が創り出され、結果として主体的で深い学び、すなわち協同学習が実現します。

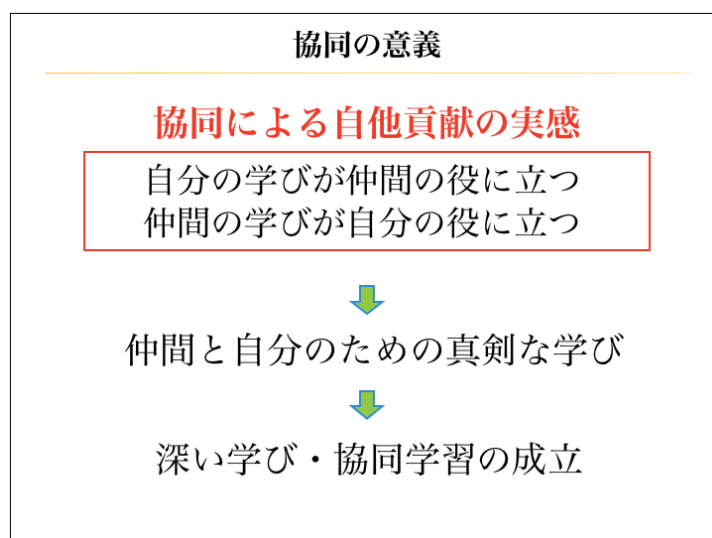
スライド 10



これまでの議論からお分かりのように「協同の精神」は協同学習の基盤となるばかりでなく、協同学習の目的にもなります。

「協同の精神」を醸成するために、協同学習の理論と技法に基づき、協同の善さを実感できる場면을創意工夫して授業に組み込み、授業を構造化します。そして、仲間との協同に基づく学習活動を繰り返し体験するなかで「協同の精神」の善さに少しずつ目ざめ、学習活動のなかで行為として表れることを期待しています。

スライド 11



「協同の精神」に基づき仲間と学び合うことで、協同の善さが理解できるようになります。協同の善さを分かりやすく述べれば、「自分の学びが仲間の役に立ち、仲間の学びが自分の役に立つ」といえます。実際、仲間と学び合うことで、授業に参加している学生は、このことを直接体験できます。その体験を意識化させることで、協同することによって、自分も仲間もグループでの学び合いに貢献できているという「相互貢献」の実感を味わえます。。

この経験に裏打ちされた学びに対する動機づけは大きな効力をもち、仲間と自分のために真剣に学ぶという、真の学びが実現します。これこそ、協同学習による主体的で能動的な深い学びといえます。

スライド 12

発表に対する総評

- 教師の意識改革：教育パラダイムのシフト
 - 協同 ← 競争・個別
 - 教育は複雑で訓練が必要である
← 専門家は教えられる
- 教師の経験知
 - 協同学習の理論と技法
 - 体験していないと指導できない

報告いただいた5件の実践は、それぞれ大変興味深い内容でした。ここでは一つひとつの実践に対するコメントではなく、報告全体を拝聴して、ALを用いた実践一般について、協同学習の観点から考えた3点を紹介することにします。

最初に、教師の意識改革の重要性です。いくらALの技法を活用したとしても、その技法を活用する教師が、教育に対してこれまでと同じ意識であれば、本当の意味でのAL、すなわち協同学習は実現できません。いわゆる教育パラダイムを競争・個別から協同に変える必要があります。一例として「専門家は教えられる」という認識から「教育は複雑で訓練が必要である」という認識への移行が求められます。

次に、教師の経験知の必要性です。協同学習の理論に基づく技法や授業を体験していない教師が、協同学習で授業を活性化することは、ほとんど期待できません。体験していないことは教えられません。是非とも協同学習に関連した研修会や、協同学習を実践している授業に参加して経験知を高めてください。活動性の高い授業づくりにとっては不可欠であり、極めて有効です。

スライド 13

発表に対する総評

- 学習方略の充実と体系化
 - Simulation, CBL, PBL, TBL, etc.



- LTD基盤型授業モデルの提案
 - 技法の体系化と重層化
 - 基礎段階：LTDを教える
 - 発展段階：LTDで教える

最後に、学習技法や方略の充実と体系化の問題です。今回の実践報告でもいろいろな学習技法や方略が活用されていました。この点について、学習技法や方略を単体として活用するのではなく、教育目的の達成に向け、さまざまな学習技法や方略の特性を考慮して選択し、それらを体系化して、繰り返し活用することが大切です。


この点を強く意識して創り出したのがLTD授業モデルです。このモデルは私が専門としているLTD話し合い学習法を授業に導入する実践のなかで培われたものです。このモデルの特徴は、学習技法の体系的・重層的な活用にあります。

スライド 14

LTD話し合い学習法

- 理想的な
 - 学習法・読解法
 - 対話法

- 論理的な言語能力の育成法



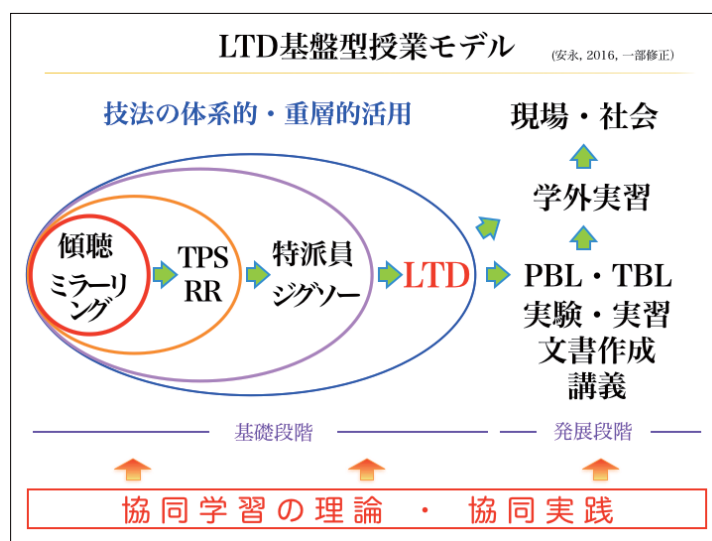
Learning Through Discussion
(米 1962 : 日 1995 から)

LTD授業モデルの中核となるのがLTD話し合い学習法（Learning Through Discussion）です。LTDは理想的な読解法であり対話法です。論理的な思考や言語技術の育成に効果的な学習法です。コミュニケーション力や対話力の効果的な訓練法ともいえます。

LTDの目的は、本物の学びの世界を復活し、学ぶことの喜びを学生に思いだしてほしいという願いがあります。残念ながら大学生ですら、学びに魅力を感じている者は少数派となっています。そんな学生たちに、もう一度、学ぶ喜びを実感してほしいという思いから開発されたのがLTDです。

LTDは協同学習に依拠していますので、協同学習における認知と態度の同時学習が期待できます。つまり、LTDを実践すると、教材である課題文の理解と記憶が深まり、課題文で得た知識の活用力が高まることが知られています。同時に、学習態度や学習スキルの育成も期待できます。

スライド 15



LTD授業モデルは、LTDを教える基礎段階と、基礎段階で獲得したLTDで教える発展段階に大きく分かれています。この基礎段階も発展段階も協同学習の考え方に依拠しています。

基礎段階では、話し合いの基本技法である「傾聴」や「ミーティング」、協同学習の基本技法である「シンク＝ペア＝シェア（TPS）」や「ラウンドロビン（RR）」、「特派員」「ジグソー学習法」を体系的・重層的に活用して授業を展開し、最後にLTDを伝えます。

この基礎段階の学習内容を前提に、発展段階として、より複雑な学習方略であるPBLやTBLなどを実践することで、PBLやTBLに本来期待される学習成果を挙げることができます。PBLやTBLに限らず、一般的な講義や実験実習、臨地実習などにおいても、その効果は確認されています。

今後、アクティブラーニングを企画・実践する際、協同学習の理論と技法を基盤としたLTD授業モデルを一つの参考にしていただければ幸いです。

以上で、私からのコメントを終わります。

ご清聴、ありがとうございました。

参考文献

関田一彦・安永悟 (2005). 協同学習の定義と関連用語の整理. 協同と教育, 1, 10-17.

須藤文・安永悟 (2011) 読解リテラシーを育成するLTD話し合い学習法の実践：小学校5年生国語科への適用. 教育心理学研究, 59, 474-487.

須藤文・安永悟 (2014) LTD話し合い学習法を活用した授業づくり：看護学生を対象とした言語技術教育. 初年次教育学会誌, 6, 1, 78-85.

関連図書 1/2

- (1) 協同学習を支えるアセスメントと評価
ジョンソンら (著) 石田 (訳) 日本協同教育学会 2016
- (2) 協同学習がつくるアクティブ・ラーニング
杉江修治 (編著) 明治図書 2016
- (3) アクティブラーニングの技法・授業デザイン
安永・関田・水野 (編著) 東信堂 2016
- (4) アクティブラーニングとしてのPBLと探究的な学習
溝上慎一・成田秀夫 (編) 東信堂 2016
- (5) ディープ・アクティブラーニング
松下佳代 (編著) 勁草書房 2015
- (6) LTD 話し合い学習法
安永悟・須藤文 (著) ナカニシヤ出版 2014

関連図書 2/2

- (7) 活動性を高める授業づくり：協同学習のすすめ
安永 悟 (著) 医学書院 2012
- (8) 学習の輪：学び合いの協同教育入門
ジョンソンら (著) 石田・梅原 (訳) 二瓶社 2010
- (9) 協同学習の技法：大学教育の手引き
バークレイら (著) 安永 (監訳) ナカニシヤ出版 2009
- (10) 先生のためのアイデアブック
ジェイコブスら (著) 関田 (監訳) ナカニシヤ出版 2005
- (11) 大学授業を活性化する方法
杉江ら (著) 玉川大学出版部 2004
- (12) 学生参加型の大学授業：協同学習への実践ガイド
ジョンソンら (著) 関田 (監訳) 玉川大学出版部 2001